

## 貝採集民の考古学 - ルソン島ラロ貝塚群

小川英文

### ラロ貝塚群の民族考古学

フィリピン、ルソン島北部を流れるカガヤン川の下流域には、河口から50kmまでのあいだの両岸に巨大な貝塚群が形成されている。セメントで護岸されていない河岸段丘の断面には、土の混入がほとんどない、深さ2m以上の貝の堆積が数十mにわたって観察でき、そのような貝層が点々と川の両岸につづいている。さらに貝層のなかには土器の破片や動物の骨などが混入しており、人びとの長年にわたる営みがつつみこまれた遺跡であることがわかる。貝塚のひろがりや深さは追うこともでき、地表面を覆った白い貝殻が幅100m、長さ500mにわたっている場合もある。このような巨大な貝塚が存在する村々では、現在でも人びとが貝を採集しながら生活している。貝層の厚みやひろがり、そして貝の採集が今日まで継続していることから推測すると、貝採集活動は過去から長く続き、土壌が堆積するひまもないくらいに継続的に大量の貝が採集され、廃棄されたことによって巨大な貝塚が形成されてきたものと予測することができる。これらの貝塚群はカガヤン州ラロ町を中心として分布していることから、ラロ貝塚群遺跡として知られている(青柳他 1988-93; Kirch 1996)(図1)。

しかしラロ町域に存在する遺跡は貝塚だけではない。河岸から数キロつづく低地水田地帯の後背地には、石灰岩丘陵が川と平行して南北に横たわっており、ここにも洞穴などの遺跡が分布している。丘陵地域では熱帯林の木材伐採が70年代までに終了し、現在では国有地となった森林を切り開いて作った焼畑や牧草地が広がっている。熱帯林におおわれていた丘陵地域は、過去から現在までイタやアグタと呼ばれる狩猟採集民が生活の基盤を置いてきた場所である。そしてそこに分布する洞穴や開地遺跡には、彼らの長年にわたる狩猟採集生活の痕跡が残されている。現在、ラロの町に住むアグタの人びとは、焼畑を作ったり、農耕民の耕作の手伝いをしたり、森から切り出した籐や薪を加工してラロの市場で売ったりして生計を立てている。木材道路を通じて流入してくる「外部世界」の影響によって、アグタ社会の環境や生活は激変したかのように見える。しかし、今日みられるような低地農耕社会と狩猟採集社会の関係は、近年の開発によってはじめて現出したと考えられがちだが、両者間には、すでに3千年以上前から相互依存関係が築かれていたという仮説も提出されている(Headland and Reid 1989; 小川 2000、2005b)。

筆者は、狩猟採集民と農耕民の相互関係の歴史過程を考古学的に検証するために、貝塚と狩猟採集社会が現存するラロ町域をフィールドとして80年代から調査を継続してきた。異なった技術レベルにある2つの社会が、長年にわたって相互に交流しあいながら3000年以上の歴史を同一地域内で生活してきた実態を復元するには、両社会の現状を調査して、過去を考えるための質のよい資料を集める必要がある。現在の資源利用の生活実態から、過去に繰り広げられたであろう経済的・社会的な関係の歴史プロセスをモデル化し、それを出土遺物で検証していく作業が求められている(小川 1998、2005b)。そこで以下では、貝採集活動の実態把握をめざし、過去の貝採集活動の実態にせまるモデルづくりを試行し、先史時代から今日までの長い時間における資源・環境利用のあり方の変化や類似性を検討する。

### 貝採集の過去を類推する

ラロ貝塚群は海岸砂丘・河岸段丘・石灰岩台地上・内陸低地、そして丘陵洞穴内と多様な立地条件をもつ。これらの貝塚を構成する貝種は、海岸砂丘の貝塚をのぞけば、いずれも淡水産二枚貝一種(イバナグ Ibanag 語でカビビ Cabibi)が他に比べて圧倒的に優勢な貝塚である。これら貝塚のC14年代は、内陸低地と丘陵洞穴が7000年前以降、台地上に立地する貝塚が4000~3400年前、河岸段丘上の貝塚では2300年前~今日までの年代が得られている(小川 2005a)。では大規模貝塚は、どのような過程を経て形成されたのだろうか。また、貝採集は専業として特殊化した生業形態であったのか、あるいは副次的生業活動だったのか。年間をつうじた自然環境の変化のなかで、貝採集活動はどのようにスケジュールされ、人びとはどのように組織されたのか。貝採集以外の農耕・狩猟・漁撈・採集などの活動は、貝塚が立地する河岸・内陸低地・台地上・海浜・熱帯林という微小環境をどのように利用していたのか。そしてカガヤン川下流域にのみ遍在する、大量に利用可能な貝という資源をもとに、貝採集民は周辺の社会集団とどのような関係を築いていたのか。このような

疑問がつぎつぎと湧いてくる。

これらの疑問に対して出土遺物はすぐには答えてくれない。たしかに貝塚から出土した土器や石器などの人工遺物、貝殻、人骨、動物骨、植物種子、花粉、炭化物などの自然遺物、さらに貝塚が立地する場所の自然環境からえられる情報は、貝塚形成過程についてさまざまに物語ってくれる。人工遺物は、ゴミ捨て場としての貝塚の機能を裏付けるように、破損して廃棄された道具・器物で構成されており、技術体系の変遷を物語ってくれる。また自然遺物は、貝塚周辺の多様な微小環境から集落へもち込まれた食物残渣というかたちで構成されており、生業活動の復元に貢献する。このように考古遺物は技術や生業など、先史時代人間集団の経済的側面をある程度まで復元してくれる。

しかし考古遺物自体が明らかにする領域にはおのずと限界がある。遺物としてけっして残留することのない、過去の人びとがもっていた環境についての知識体系や生産組織の実態、他集団との社会関係などについて語ることはない。遺跡に痕跡が残りにくい人間行動の領域へアプローチするためには、遺物の研究とは異なる目的と方法による調査・研究が必要となってくる。そのような場合には民族考古学の手法を用いて、現在の人間行動から過去のそれを類推するモデルをつくり、遺物が語らない大きな間隙を埋めていく作業が有効である(小川 2003b、2005b)。

### 貝塚形成の歴史過程

カガヤン川の川幅は、河口から 20km のラロ・セントロ(Lal-lo Centro)でも 1km と広い。河面傾斜は 50km の距離に対して標高差 10m で、流れは緩やかである。そのため川は海の潮汐の影響を受け、155cm の干満の差が生じる(Bureau of Coast and Geodetic Survey 1982)。満潮時には海水が逆流し、川の水とぶつかって渦ができる。しかし最大の貝塚があるカタヤワン村での川水の塩分濃度は 1% 以下と低く、生息する貝も淡水産である。

貝塚は現在までに 20 ヶ所以上が確認されている(図 1)。いずれもカビビを主体とする貝塚群である。その分布は川辺から内陸丘陵まで広い範囲で確認されているが、大半は河岸段丘上に立地しており、2300～1000 年前の鉄器時代に属す有文と無文の黒色土器、埋葬人骨や動物骨・植物種子、さらに中国、ベトナム、チャンパなどから 14 世紀以降にもたらされた陶磁器などが出土する。そのなかでもカタヤワン貝塚は長 2km、幅 100m、厚さ 2m と最大規模をほこる。現在でもカガヤン川下流で貝採集を行っている人びとは、このような大規模な貝塚の上で生活を営んでいる。

河岸から約 1km 離れた、水田がひろがる標高 6、7m の低地でも 3 ヶ所の貝塚が確認されている。径 50m の範囲に深さ 3m 以上の貝層が堆積し、6500 年前の C14 年代がえられているが、土器が出土していないため、農耕以前に狩猟採集民が形成した貝塚と考えられる。

かつて熱帯林が広がっていたカガヤン川東岸の石灰岩丘陵では、河岸貝塚から直線で 6km、標高 50m の地点にある洞穴を発掘した。ここではカビビ主体の貝層から剥片石器 40 点が、さまざまな時期の土器片とともに出土した。これは洞穴が長期間利用されてきたことを示唆するが、同時に、剥片石器と土器が同じ貝層から検出される例はごくわずかであることから、狩猟採集民と農耕民がともにこの洞穴を利用していた様子もうかがわせている。

これまでの発掘調査の結果から、貝塚の歴史を整理すると 6 期に分かれる。今から 4000 年前に土器が出現する以前には、カガヤン川河岸から 1km の内陸低地でまず貝塚が形成された(図 2)。つぎに 4000～3700 年前には剥片石器から土器へと移行する様子が、河口から 40km 地点のガエラン貝塚で確認されている。3400～3000 年前になると河岸全体に遺跡が急増する。このころの人間居住の痕跡はいたるところにみられ、河岸貝塚の下のシルト層には必ずこの時期の無文赤色スリップ土器群が検出される。しかし当時の人びとは貝塚を形成していない。その理由として当時のカガヤン川下流域の水流が海進などの影響を受けて緩慢になって沼地が広がり、貝の生息に適さない環境であったことが想定されている。

つぎの 2900～2400 年前になると遺跡数が激減する。河口から 30km、標高 50m の石灰岩台地上に位置するマガピット貝塚では、深さ 5.5m の貝層から大量の有文赤色スリップ土器群が出土した(写真 1)。この土器群はマガピットから 10km 東、標高 100m の丘陵森林内の遺跡から剥片石器とともに出土している。しかし貝層形成はみられず、よりカガヤン川に近い洞穴とは様相を異にしている。

2300～1500 年前の有文黒色土器群と 1500～1000 年前の無文黒色土器群の時期になると、大規模な河岸貝塚がいたるところで形成されるようになる。とくに両時期にわたって形成された貝塚の規模は 500m から 2km の長さにおよぶ。また有文黒色土器群期の貝層の大半からは、鉄生産が行われていたことを示す鉄滓が出土している。貝採集と水田耕作などの生業活動以外に鉄を生産することによって、資源の流通ネットワークを制御できるような統合度の高い社会が存在し

ていたことを示している。鉄鉱石はカガヤン川西岸の丘陵に産する。日々の食料に供する以上に大量の貝を採集し、貝同様に偏在する資源を利用して鉄を生産し、内外の世界との間で物資と情報を交換し、制御・分析して社会の維持を図っていたものと考えられる。

貝塚の最後の時期は、スペイン支配直前から今日までにあたる。貝塚からの貿易陶磁の出土は、東南アジア世界のなかで、この地が地域ネットワークの核をなしていた可能性を示唆する。しかしスペイン支配がはじまると、ローカル社会の経済的・政治的自律性の活力は、世界システムへの編入によって著しく衰退したと考えられる。さらに近代の貨幣経済システムのなかで、採集された貝は貝殻ごと市場で売買されるようになり、貝塚への貝殻の供給が大幅に減少し、現在に至っている。

## 貝塚に暮らす

カガヤン川両岸で、現在、貝採集が行われている村のなかで最も採集人口が多いのはカタヤワン村である(写真2)。カタヤワン貝塚はラロ貝塚群中最大、長さ2km×幅100m×深さ2mの規模をもつ。貝塚は2000年ほど前から形成されはじめ、2m厚の貝層にこの間の歴史が刻まれている。貝採集を行うのはイバナグの人びとである。19世紀以降、ルソン東北西部から移住したイロカノの人口増加によって、現在、村々ではイバナグとイロカノが混住している。しかしイロカノの人びとは、わずかな例外をのぞいて貝採集を行ってはいない。カタヤワン村の人口は調査開始時点の1985年の統計では2125人である(Municipality of Lal-lo 1985)。そのうち貝採集で生計を立てているのは68家族(431人、男性243人、女性188人)約100世帯である。これらのうちフルタイム、すなわち自身が主要な生業活動と認識して貝採集、漁撈、貝の仲買などに従事しているのは男性101人、女性16人である(図5)。またパートタイム、つまり副次的と認識して川での生業活動に関わっているのは、男女あわせてのべ369人である(註1)。貝採集活動の中で最も基本となるのは、後に述べるようにタクという道具で川底を搔いて、貝をすくい上げる方法である。タクによる貝採集に従事している人数は、フルタイムとパートタイムあわせて96人である。川を舞台とする生業活動以外では、水田耕作、賃労働等がみられるが、貝採集者の多くもこれらの活動を組み合わせながら生計を営んでいる。

貝塚から出土する貝種は、淡水産二枚貝3種、淡水産巻貝3種、陸産のマイマイが1種である(表1)。そのうち現在、おもに採集されている貝は3種で、いずれも淡水産二枚貝である(写真3)。カビビはサイズが大型のもので縦横6x5cm、高3cm、小型のもので縦横2.5x2cm、高1cmである。重さは大型のもので殻重量55g、身(未乾燥)重量10gである。ラロの貝塚はほぼこの一種で形成されており、現在でもこの貝が採集の主な対象である。生息域はカマラニウガンからガッタランまでの40kmの範囲で、年間を通じて採集されている。採集後ほとんどの場合、採集者から仲買人に売られ、仲買人から市場に運ばれ消費者に売られている。このため採集者による自家消費そして採集村での貝殻の廃棄はほとんど行われていない。

アシシ(Asisi)の平均的サイズは縦横1.5x1.5cm、高1cmである。シジミの一種で、タガログ語ではトゥリア(tulya)と呼ばれ、フィリピンに広く分布している。この貝は一度に大量に採れるが、雨季(10~1月)には収量が減少する。この貝を採るようになったのは最近のことで、採集過剰でカビビが減少し、それまで採集しなかったアシシを採集しはじめ、減少したカビビの分を穴埋めしたのと考えられる。発掘資料からもこれを裏付けるように、その大半は表土1層でしか出土しない(表1)。この貝もカビビ同様に売買の対象とされ、自家消費は少ないが、売買の際に貝殻から身だけを取り出したほうが高く売れるため、採集後に殻剥きが行われ、貝殻は家のまわりに廃棄される。単価が低いため、大量に採集される。

ギノオカン(Ginookan)の平均的サイズは縦横2.5x1.5cm、高0.8cmである。横長で殻が薄い。その分布範囲は、採集民からの情報を総合すると、ラロ・セントロからサンタマリアまでに限定される(図1)。現在採集されている3種の貝のうち最も収量は少ないが、発掘資料によると少量にもかかわらず連続と採集されていたことが分かる(表1)。ギノオカンは採集量が少ないうえに、採集後の寿命が短く、翌日には死んでしまうため、集落外の市場での売買には適していない。そのほとんどが自家消費される。またこの貝はアラマン(alamang)と呼ばれる塩辛の一種に加工されることがあるので、この場合にも貝殻が集落内に廃棄される(写真5)。この他淡水産巻貝3種(Agurong, Liddak, Biruko)、陸産のマイマイ1種(Bisukol)が貝塚から出土するが量は少く、アグルン1種をのぞけば現在では採られていない。

カタヤワン村で行われている今日の貝採集からは、遺跡に残された記録からは読み取ることのできない、資源と人との関係から導かれた、特定の脈絡のなかで展開される行動についての情報を受け取ることができる。そこで以下では、考古

遺物からは知りえない環境、資源、技術の相関関係に注目しながら、貝採集の実態を把握していく。

## 貝の採集法

現在、貝採集の方法にはタク、カルワス、素潜り、素手の4つの方法がある。以下で示す図表のもととなる数値データは、おもに1986～87年にかけて行った貝採集者からの聞き取りによっている。

### タク

タク(taku)と呼ばれる道具で行われる貝採集は最も主要な方法である。使用道具はタクの他にリギック(liggik)とバランガイ(barangay)と呼ばれるボートである(図3)。タクは三角形の木枠に針金でかごを編み、それに柄をつけたものである。リギックは竹を編んだ3x1mほどの、二枚ひと組の衝立のようなものである。ボートは長さ5m、幅1mほどの、板材を組んでつくったものである。タクの網は現在では針金であるが、かつては籐を材料として編み込まれていた(写真4)。タクによる採集方法は、まずボートを川の中央部に漕ぎ出し、柄をボートに繋がれたタクを川底に降ろす。つぎに2枚のリギックをボートの長軸と直交するように両側に取り付ける。ボートの舳を流れに抗するように向けると、リギックが川の流れを受け止め、タクが引っ張られて川底を引っ掻き、かごに貝が入る。タクをボートに引き上げ、かごの中身を取り出す(図3、写真6)。

川底に接するタクの下面には竹を削って先端をとがらせた、長さ20cm、幅1.5cmの歯(ニパン nipan)が何本も差し込まれていて、歯と歯の間隔を調節することで、採集する貝の大きさを変えることができる。ニパンの間隔を変えて、採集調整の対象となるのはカビビである。ニパンの間隔を狭めて小さなカビビを採集し続ければ、一定期間だけは収量が増えるが、これを続けると採取圧がかかり、そのうち貝がなくなることは明白である。しかし不漁が続けば採集するカビビのサイズを落としていく以外に道はない。ほそぼそでも現在の収量を確保し、しかも将来にわたってカビビが採集できるためには、どのくらいまで採集するカビビのサイズを落としていくかを決定しなくてはならない。カビビより小さいアシシを採る時には、ニパンを密に並べる。タクの網の目も小さくする。ニパンはタクの先端にあって、川底を掘り返しているため消耗が激しく、ボートに常備されている。

タクによる貝採集は川の流れを利用しているため、6時間ごとに起こる潮の干満にあわせて行われる。タクとリギックを積んだボートを漕ぎだし、その日あたりをつけたポイントへ向かう。出漁前に仲間内で貝が集まっていそうな場所の情報を集め、その日のポイントを決める。特定の場所に多くのボートが集中することもあるが、採集民各自はポイントについての情報を経験に基づいて蓄積しており、ひとりだけ他の場所へ向かい豊漁を期することもある。しかし採集場所も、貝の生息域がカガヤン川下流域に限定されているため、おのずと絞られてくる。貝採集は昼夜ともに行われ、いずれに出漁するかは採集者各自の好みによるが、夜になるとそれまで川底砂中深くにいた貝が表面に上ってくるので、夜のほうがいいという採集者もいる。

タクの実際をひとりの採集者(59才、1986年6月7日朝7:35から午後1:00までに行われた貝採集)に同行した際の記録にそって追ってみよう。朝7:35、船を漕ぎ出す。河岸は流れが緩やかで、風も穏やかだったが、岸から遠ざかるにつれて流は速く、風も強くなっていく。7:55、その日のポイントに着く。川の中心よりやや東寄りである。このころ干潮になって川の流れは海に向かっていく。まずタクを川底に下ろし、リギックをセットする。8:30、1回目のタク上げ。上げる時にはリギックをいったん水中から引き上げる。タクをボートに引き上げて中身を取り出し、そのなかから貝を選び出し、自動車オイルの容器に入れる。この容器が貝でいっぱいになると1ガンタ(1 ganta=3リットル、重量約3kg)となる。これら一連の作業が終わると、もう一度タクを川底に沈め、リギックをセットする。

このように作業をくり返し、5時間半後の午後1時に岸へもどるまで、合計16回タクを引揚げ、カビビ1ガンタ=約3キロの収量を得た。各回のタク上げの間隔は15～20分であった。活動中にすこしづつ下流へ流されるため、この日2回、約2時間ごとに最初のポイントにもどっている。この日の収入はカビビの売り値32ペソであった。5時間半という活動時間は、ほぼ引き潮の時間帯と一致する。3kgというカビビ収量は、1986年6月における他の採集者の収量と比較すると、平均的な量であると評価できる。しかし強い日差しと照り返しから逃れる場所のないボートの中で5時間半にわたる作業はつらいものであった。そのような作業の中で、なんとかその日の目標である1ガンタのカビビを採集できたことは幸運である。下でくわしく述べる労働時間とカビビ収量のデータを比較すると、時間をかければ必ず収量が増えるものではないことが読み取れる。むしろ貝の収量はその日の採集ポイントに大きく影響を受けるという。

## カルワス

径 50cm ほどの補虫網に長い柄をつけたような、カルワス(karwas)と呼ばれる網を用いて行われる貝採集活動である。採集する貝はギノオカン主体である。採集方法は胸くらいまで水深のある川辺や砂州の浅瀬で網を底につけ、柄を前方で両手で持ち、足で川底の砂を網に蹴り入れる。そして網に入った貝を集めるというものである。ギノオカンは収量が少なく、そのほとんどが世帯内で調理されたり、塩辛に加工されて自家消費され、売買されることがほとんどない。そのため一回のカルワスによる収量がどのくらいのものであるかは明確にはなっていない。また図4によると、カルワスに関与する人数は男女あわせても4%と限られており、貝採集活動中、従事者が最も少ない。この理由には生息域が限られるギノオカンを対象にしている点が重要である。大量に採れるものではないギノオカンの採集に適した方法は、タクのように大がかりな道具だてではないカルワスだと考えられる。

## 素潜り

川の中央部に泳いで、あるいはボートで行き、水中メガネを着けて川底に潜り、手づかみでカビビを採るという方法である。この採集法は水の透明度が高い時期(4月~9月)に盛んである。雨が多く、水が濁っている雨季にはあまり行われていない。しかし透明度が高いといっても当該地での水中視界は1、2mほどしかなく、まして川底を掘り起こして貝を探すとするとほとんど手探りである。なんと単純な方法であるが、図4、5からは多く(76人)が関与していることがわかる。しかも10代、20代の男性がほとんどである(図7)。そしてそのほとんどがパートタイムであることも読み取れる。10代、20代の男性は、まだボート・タク・リギックのセットを所有しておらず、親から独立していない者たちがほとんどである。パートタイムでこのしごとに関与していても、これ以外にフルタイムのしごとがあるわけではない。10代の少年たちは川遊びの中で潜り、または手製の水中銃で魚をとる合間に貝を採ってくる。20代の青年たちは、父親や兄弟・従兄弟たちとおこなうタクでの採集の合間に潜っている。このように素潜りによる貝採集は多くの人間が関与するいっぽうで、生計を支える責任のない少年の遊びの要素を強くもっている。しかし一家5人の生計を支える12才の少年の例もある。この少年は父が死んで母と3人の弟を食べさせるために毎日素潜りでカビビを採っている。タクを行っている大人たちも、時にこの少年が自分たちよりも多くのカビビを採ることを評価する。

## 素手

川辺や中州の浅瀬に行って、素手で砂を掘り起こして貝を採る方法である。潮干狩りのように熊手で砂を掘ることもなく、素手で行われるため、これに用いられる道具は、採った貝を入れて持ち帰る袋だけである。採集対象はギノオカンが中心である。素手による潮干狩りに従事する人数は、貝採集活動のなかで最も多い、100人以上が関与していることがわかる(図4)。そのほとんどは10代以下の子どもと女性であるが(図7)、素手による潮干狩りには少人数の大人の女性と子ども達が集団となって出かけることがほとんどである。素潜りに比べると女性の関与が多くみられる点で異なるが、道具もほとんど必要なく、遊びの要素が強いなどの点が共通している。

## 貝採集の労力と収量

貝の採集方法は以上の4つであるが、貝塚の巨大さを見れば、いったい1日のうちに何時間かけて、どの種類の貝を何キロ採り、そのうち何キロを自家消費し、また売ることによってどのくらいの収入があったのか、労働実態を把握することは大いに関心のあるところである。そのためまず労働時間、収量、自家消費・売買量、収入などの実態について、1986年6月から11月まで73人の貝採集者に聞き取りを行った。いずれも男性がタクで行ったカビビとアシシの採集例である。その結果、ひとりあたりの貝採集に対する労働時間は、最大8時間、最小2時間で、1日の労働時間の平均は5.2時間であった。カビビの最大量は9.5kg、最小が1kgである。アシシの最大量は48kgで、最小が3.3kgである。これに対して、ひとりあたりの収入は、最大105ペソ、最小16ペソで、平均45.5ペソであった。採集された貝はほとんどが売買されて現金に換えられるが、一部は自家消費される。自家消費量については、カビビの15例が0.5~3kg、アシシの5例が0.5~1kgである。また採った貝すべてを自家消費した例は、カビビのみ3例あり、その量は1~3kgであった。

この調査で特筆すべきは、貝がまったく採集されなかったという事例がなかったことである。特定の個人について継続的に毎日の採集量を調べてはいないので、貝採集がどれだけ安定性をもつものか即断はできないが、ランダムに選んだ貝採集者のいずれもが収入を得ており、平均50ペソ近い現金を手に行っていることから、適度な収入の安定性は指摘す

ることができる。

つぎに指摘できるのは、採集時ごとに採集対象貝種が明確に設定されている点である。採集に出かける時には、どの貝を採るかが決まっているということである。もちろん採集者自身は、事前に対象貝種とポイントを選定すると証言しているが、データもこれをサポートしている。73人の事例中、カビビのみの採集例は54例、アシシのみが14例、そしてカビビとアシシがともに採集された事例は5例のみである。採集者各人がお互いに貝が集中する地点についての情報を交換しながらその日の採集ポイントを決定するが、採集事例が示しているのは、採集民はその日、貝が集まりそうなポイントを狙って出かけて行き、特定の貝種を採集するという点である。カビビとアシシがいっしょに採集された例では、どちらか一方の収量が大きく、採集の狙い目ははじめから定まっているものと考えられる。

また別の理由としてカビビとアシシの価格のちがいが関与していると思われる。3kgで4ペソと価格の低いアシシは大量に採らなくては採算が取れない。それでもアシシ採集は成功しており、アシシ単独採集14例中の最小採集量は16kg(20ペソ)である。しかしアシシは一年間をとおして採集することができない。川が増水する10月から1月にかけてその数は大きく減少する。いっぽう3kgで価格が35ペソ前後のカビビは、量が少なくても高く売れる。しかしカビビのマイナス面は、一日の収量が73例中最大で9.5kgと少ない点にある。そこで採集者はどのように生業戦略をたてるのか。値段の高いカビビを選ぶか、あるいは安い分、大量に採らなくてはならないアシシを選ぶかという二者択一に迫られる。

そこでカビビとアシシの時給効率を算出してみた。1時間の労働に対する収入の比較である。カビビのみを売った51例とアシシのみの14例、それぞれの労働時間、収量、そして収入の平均値から時給を計算した。その結果は、カビビが8.7ペソ/時、アシシが8.1ペソ/時であった。0.6ペソの差をどう評価するのだが、どちらを選んでもそれほど大きな効率の差はないということになる。それでもカビビの採集には、その事例の多さ、採集道具への投資額の大きさ、そして技術の歴史の長さなどから、生業における重要な位置づけはアシシを凌いでいる。戦後のカビビへの採集圧を補う役割を担ってきたアシシとは一線を画している。いずれにしても双方のマイナスとプラス面を比較し、さらにその日の生活状況や差し迫った現金の必要性が加味され、日々の採集対象となる貝種が決定されるのである。

### 貝種・採集場所・用具の相関関係

採集対象である3種の貝に対して、採集行動のあり方はさまざまである。貝種ごとの生息域と採集場所、そして貝種と採集用具との特定の相関関係は、貝採集行動にいくつかのパターンを与えている。カビビはタクを使って川の中央部で採集される。またカビビの生息域はカマラニウガンからガッターランまで約30kmにわたっている。この領域を人びとは採集領域とし、そのなかで特定の採集場所を日々模索している。アシシの採集貝もタクであるが、カビビよりもサイズが小さいため、タクのニパンと網の目を小さく調整する。逆にニパンの間隔を大きくするのは、小さなカビビを残し、乱獲から守るための手段となっている。ギノオカンは、生息域がラロ・セントロからサンタマリアまでの狭い範囲(10km)に限定され、中州や川辺などの浅瀬でカルワスか素手で採集される。

しかしこのような貝種・採集場所・採集用具間にみられる特定の関係も、つねに固定的であるとは限らない。浅瀬のアシシもカルワスや素手で採られることがあり、カビビを川底へ潜って素手で採ることもある。採集行動には特定のパターンをつくり出す限定要因がある。それはまず貝の生態や生息域、そして貝を最も効率よく採集するために投資される道具などである。しかし効率のよい道具がなくても、また道具を転用することによって、特定の対応関係からの逸脱を許容する柔軟性が生まれるのである。また貝類の生態と道具の関係には年齢や性差も大きく関与している。青壮年の男性の場合、技術的に最も複雑だが、多くの収穫が期待できるタクが行われる。いっぽう若年層の男女の場合、単純な採集方法を用い、収穫の期待値も低い。この収穫が結果として成功を収め、タクと同じくらいに生計を支えたとしても、採集行動には遊びの要素が多く含まれているのである。

### 貝採集の季節性

貝塚の形成過程を復元する際、ひとつのまとまりを構成する貝の層が、いつ採集され、食されて、廃棄されたのかを特定できるなら、年輪を重ね、積み上げて年代を特定していくように、貝層の歴史も編み上げていくことができる。日本では、二枚貝の断面に残る成長曲線の分析をとおして、貝層の季節同定を行う研究が80年代には確立され、成果を挙げてきた(Koike 1980, 1986; 樋泉 1987)。現在、貝の季節同定による貝層形成過程の復元手法は、日本における貝塚発掘調査のスタンダードとなっている。しかし熱帯地域においては、季節的变化の痕跡を見つけることは容易でない。ラロ

貝塚群でもカビビの貝殻成長曲線の分析から季節変化を捉えようとしてきたが、これまでに成長線の集まり方に粗密があることがわかっている。粗密のちがいは、水温の高低によって起こるものと予測している(樋泉岳二私信)。

いっぽう貝採集の観察から得た季節性についての情報からは、アシシは雨季には採集量が大きく減少するということが分かっている。ルソン島北東部では明確に雨季と乾季を区別できないが、比較的雨の多い時期は10月から1月である。年間を通じて採集できるカビビに対して、この時期アシシはほとんど採集されていない(図8)。

### 貝採集と性差・年齢差

つぎに性差、年齢差が、貝採集にどのような影響を与えているかについて検討する。まず採集活動における性差について図9をみると、男女間で生計活動への関わり方が大きく異なっている。タクや素潜り、そして漁撈に女性の関与はほとんどみられない。いっぽう素手での潮干狩りには男性とほぼ同数、カルワスには男性11人に対し女性5人が関与していた。このことは浅瀬で行われる貝採集には女性も男性同様に関与するが、川の深いところでは男性が中心になることを示している。このように男性と女性とでは、川とのかかわり方が異なっており、資源利用に直接かかっているのは男性である。

しかし貝の仲買と市場での販売は女性の独壇場で、男性の関与はほとんどない。カタヤワン村で貝の仲買人をしている女性たちは12人で、そのすべてが貝採集民世帯の主婦であるが、40、50代の年齢の女性が大半を占めている。60代になると女性のほとんどが、貝をめぐる関わりを持たなくなっている。

つぎに男性間の年齢差も川での活動のあり方に違いを生じさせている(図6, 7)。タクや漁労といった川での活動の中心には20代男性の多くが関与するが、同時に素潜りにも多くが関与している。30代以上の男性は一家の柱としてタクや漁労に中心をおいている。10代では潮干狩りや素潜りに多く関与しているが、10代前半と後半では生計活動への関与のしかたが異なっているようである。それは10代男子のタクや素潜りのフルタイム関与に現れている(図10)。素潜りは貝採集の効率からすれば、生計活動中での重要性は低いかもかもしれないが、タクや漁労同様に極端に男性の比重が大きい生業活動として年長者の間でも続けられている。それとは逆に素手で行う潮干狩りは、加齢とともに行われなくなり、20代以降になると急に減少する。また漁労では専従者の数が少なく、パートタイムの比率が高いが、これはちょうど貝採集と補完的な関係にあるものと考えられる。

### 年間総収量の推定

貝採集の検討の最後に、カタヤワン貝塚のような巨大な貝塚が何年かかって形成されたのか、現在の採集人数とカビビの収量から推定してみたい。用いるデータは年間総収量である。これには2つのデータをもとに算出した。ひとつはカタヤワン村12人の仲買人が一日に買い入れる平均量×365日である。

$$\text{カビビの一日平均取扱量 } 5.1\text{kg} \times 365 \text{日} = 1,861.5\text{kg} \times 12 \text{人} = 22,338\text{kg} = \text{約 } 22 \text{ト}$$

別の計算方法は、採集者ひとり当りの一日平均収量×年間作業日数から算出する。

$$\text{カビビひとり当りの一日平均収量 } 4.2\text{kg} \times 274 \text{日} \times 75 \text{人} = 86,310\text{kg} = \text{約 } 86 \text{ト}$$

2つの計算式から得られた結果は大きく異なるものとなったが、22～86トンが年間総収量の下限・上限と考えられる。

つぎにカタヤワン貝塚の法量(2000m×100m×2m=400,000?)が何年で形成されたものかを推定する。発掘の際に各層から貝層サンプルを20cm角(0.008?)採取しており、この重量が約3kgである。いずれの層も混貝率90%以上なので土の容量は考慮しないものとする、1?の貝重量が375kgとなる。400,000? = 37,500トン×4 = 150,000トン÷年間総収量22トンとすると、形成期間は6818年。上限のデータでは、150,000トン÷86トン=1744年となる。

しかしこの形成期間は現在の採集者数75人にもとづいて算出した年数である。先史時代の貝採集人数を、古老からの証言をもとに戦前までの20人と仮定すると、この約4倍の年数がかかったこととなる。実際の形成年数は、C14年代測定値では約2000年間なので、算出された年数は実際から大きく外れることになる。むしろ先史時代の収量が現在の約4倍であったと考えたほうが妥当であろう。すると年間総収量は80から90トンと推定される。

### 貝塚の現在と過去

まず、現在の貝採集の実態から知りえたことをまとめてみよう。

1. カガヤン河下流域に分布する貝塚群には、現在も貝採集をつづける人びとが生活し、タクを主要な道具として3種

の淡水産二枚貝を採集している。カビビとギノオカンは過去から今日まで採集されつづけていたが、アシシは戦後から採集されるようになった。

2. カビビの個人的採集活動には季節的な変化はみられないが、アシシは雨季にほとんど採集されないという季節性がみられた。カビビ収量の変動は雨季・乾季のちがいよりむしろ、日々の個人差のほうが大きい。

3. カビビの個人収量は、一日平均 5.2 時間の採集時間に対して 4.2kg であった。調査事例中、貝が採れない事例は一例もなかった。カタヤワン村の貝採集は生業活動としてある程度の安定性をもっていると考えられる。

4. 貝採集活動への男性の関与に比べて、女性の関与は低い。しかし貝の売買は女性の独壇場である。漁労にかんしても女性の関与は低い。男性は資源を環境から抽出する役割を担い、女性は得られた資源を管理するという性による分業が成立している。

5. 男性の貝採集者のなかで、10 代の少年層は素手や素潜りといった技術的に単純な貝採集から関与しはじめる。20～50 代の青・壮年層は技術的により複雑なタクに生業活動の中心におきながらも、依然として素手や素潜りを一定の割合で継続している。60 代の老年層になると川での活動が減少するが、タクに集中するといった傾向がみられる。

6. カビビとアシシとの時給効率を比較するとほとんど差はなく、むしろ採集場所の選択がその差を生み出していると考えられる。

7. 採集された貝はほとんどが貝殻ごと売りに出され、自家消費される量は非常に限られている。また貝の塩辛への加工も量的に限定されていて、貝塚を形成している大量のカビビの貝殻が、今日、村落内に廃棄されることはない。

8. 採集された貝は村の女性によって買い取られ、市場へ運ばれて貝採集とは無縁な消費者に売られる。貝採集者、仲買人、消費者の間を結ぶ貝の流通システムは、今日、貝採集そのものを成立させる要素となっている。生産と市場が交換を通じて一体となることによってはじめて、カガヤン川下流域の貝採集が成立している。

9. カタヤワン貝塚の形成過程を現在の貝収量から推定すると、約 2000 年間に毎年 80～90 トンのカビビを 20 人が採集し、貝殻を廃棄することによって形成されたものと予測される。さらに、かつてのカビビの年間総収量は現在の 4 倍にものぼるものであったと予測された。

以上のまとめをふまえて、貝塚の過去をふり返る。巨大な貝塚を今日に残した人びとは 2000 年間にわたって連綿と貝を採集し、貝塚を作りつづけてきた。今日の貝採集のあり方との大きなちがいは、自然環境や技術的な面ではなく、貝の交換のかたちである。貝塚の巨大さが示すように、自給をはるかにしのぐ量の貝を採集して他集団との交換財として使っていた可能性が想定できるが、今日では貝は市場で売買されている。かつての物資の交換は、今日、アグタの人びととの間にみられる食料や森林の物産の交換がまず想起される。しかし貝塚に廃棄された貝殻の量を考慮すれば、地域内各地から交換によって得た物資を集積し、より遠隔の地域との交易にも貝が用いられた可能性が想定できる。その際には大量の貝の身を塩辛加工や乾燥加工して保存する必要がある。今日ではその実態は観察できないが、貝採集民(農耕社会)と狩猟採集民との間にみられる、地域内での交換の民族考古学によって解明されることが期待できる。

## 謝辞

本稿執筆の機会を与えてくださった印東道子先生に感謝いたします。本研究はフィリピン国立博物館と日本人研究者との共同で実施されている研究成果に基づいている。また本研究は以下の研究助成により実施が可能となった。平成 15～17 年度文部科学省科研費基盤研究 A(1)「北部ルソン島ラロ貝塚群の発掘調査 - 先史狩猟採集社会と農耕社会の相互関係の解明」(課題番号 15251005、小川英文研究代表者)、特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築」(領域番号 606、内堀基光領域代表者) 計画研究「生態資源の選択的利用と象徴化の過程」(課題番号 14083207、印東道子研究代表者)、平成 14、15 年度高梨学術奨励基金研究助成「カガヤン河下流域における貝塚遺跡群出土土器の編年的研究」(小川英文研究代表者)。

## 註:

1. 主要生業活動について、貝採集民自身に川での活動 6 種のうちから選択してもらった。ほとんどの場合、ひとりが複数の生業活動に従事しているので、その際には各自の判断で、まず主要なものを 1 つだけ選び、そしてそれを副次的なものとして複数選択してもらった。以下の議論では、主要な生業活動として 1 つ選択されたものをフルタイム、その他複数選択された活動をパートタイムとして便宜的にここでは呼んでいる。また独立して生計を営んでいない子供の活動については、すべてパートタイムの活動として記録した。

## 文献目録

青柳洋治・M. L. Aguilera, Jr... 小川英文・田中和彦

1988 「ラロ貝塚群の発掘」『上智アジア学』6: 63-104

1989 「ラロ貝塚群の発掘(2)」、『上智アジア学』7: 101-131



- 1991 「ラロ貝塚群の発掘 (3)」、『上智アジア学』9: 49-137
- 1993 Excavation of Hill Top Site, Magapit Shell Midden in Lal-lo Shell Middens, Northern Luzon, Philippines. *Man and Culture in Oceania* 9: 127-155.
- Bureau of Coast and Geodetic Survey
- 1982 Tide and Current Tables, Philippines. Bureau of Coast and Geodetic Survey, Fort Bonifacio, Pasig, Metro Manila.
- Classen, C.
- 1991 Normative Thinking and Shell-Bearing Sites. In M. Schiffer (ed.) *Archaeological Method and Theory* 3: 249-298. Tucson: The University of Arizona Press.
- Garong, A.
- 2001 Culture in Trash. An Archaeological Excavation of Conciso Property Shell Midden Site, Catayauan, Lal-lo, Cagayan Valley, Northern Philippines. 『東南アジア考古学』21: 120-145.
- Headland, T. N. and L. A. Reid
- 1989 Hunter-gatherers and their neighbor from prehistory to the present. *Current Anthropology* 30: 43-66.
- Kirch, P.
- 1996 *The Lapita Peoples*. Cambridge: Blackwell Publishers.
- Koike, Hiroko
- 1980 Seasonal Dating by Growth-line Counting of the Clam *meretrix lusolia*. *The University Museum, The University of Tokyo, Bulletin* 18.
- 1986 Prehistoric Hunting Pressure and Paleobiomas: An Environmental Reconstruction and Archaeozoological An analysis of a Jomon Shellmound Area, In Akazawa, T. and C. M. Aikens (eds.) *Prehistoric Hunter-Gatherers in Japan*, Tokyo: University of Tokyo Press.
- Municipality of Lal-lo (ed.)
- 1985 *Barangay Profile of Catyauan*. Municipality of Lal-lo, Cagayan.
- Meehan, B.
- 1982 *Shell Beds to Shell Midden*. Canberra: Australian National University.
- 三原正三・小川英文・田中和彦・中村俊夫・小池裕子
- 2005 「フィリピン、ラロ貝塚群における剥片石器～無文黒色土器群期の AMS<sup>14</sup>C 年代」、『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』16: 169-180
- 小川英文
- 1997 「貝塚洪水伝説 - フィリピン、ルソン島北部カガヤン河下流域における貝採集民の民族考古学」、『東南アジア考古学』17: 119-166
- 1999 「考古学者が提示する狩猟採集社会イメージ」、『民族学研究』63-2: 192-202
- 2000 「狩猟採集社会と農耕社会の交流 - 相互関係の視角 - 」、小川英文編 『交流の考古学』: 266-295、朝倉書店
- 2003a 「ラロ貝塚群出土有文黒色土器群の型式学的編年研究」 『東南アジア考古学』23: 23-57
- 2003b 「野性の残像 - 過去をめぐるイデオロギーの磁場」、スチュアート ヘンリ編『「野生」の誕生 - 未開イメージの歴史』: 71-102、世界思想社
- 2005a Typological Chronology of Pottery Assemblages from the Lal-lo Shell Middens in Northern Luzon, Philippines. 『東南アジア考古学』25: 1-31.
- 2005b 「森と川の民の交流考古学 - 先史狩猟採集社会と農耕社会との相互関係史」、池谷和信編 『熱帯林に暮らす人々』: 35-63、人文書院
- Tanaka, K.
- 2002 Ceramic Chronology in Northern Luzon: Typological Analysis of the Pottery from the Lal-lo Shell-middens. Ph. D. Dissertation. University of the Philippines, Quezon City.
- 2004 The Continuity and the Discontinuity of the Occupation of the Shell-midden Sites in the Lower Reaches of the Cagayan River, Northern Luzon. - with the relation to the floods of the Cagayan River. In V. Paz (ed.) *Festschrift for Wilhelm G. Solheim II*: 158-183. Quezon City: The University of the Philippines Press.
- 樋泉岳二
- 1987 「貝塚における破砕貝の形成過程について」、『文学研究科紀要別冊第 14 集』哲学・史学編: 79-92、早稲田大学大学院文学研究科